九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

韓国の中学生における学校不適応の実態と認識

宋，映沃

針塚，進

https://doi.org/10.15017/857

出版情報：九州大学心理学研究. 2, pp.145-151, 2001-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2001, Vol.2, 145-151

韓国の中学生における学校不適応の実態と認識

宋　映　沃　九州大学大学院人間環境学府
針塚　　進　九州大学大学院人間環境学研究院

A research on the understanding and the actual condition of school maladjustment in korean junior high school students.

Song Youngok *(Graduate school of human-environment studies, Kyushu university)*
Harizuka Susumu *(Faculty of human-environment studies, Kyushu university)*

The purpose of the present study is to contribute to prevention and support of School maladjustment through investigating on the understanding and actual condition of school maladjustment in Korean junior high school students. Participants were 154 junior high school students in Korea. Results were as follows: 1) Many students had experience not to want to go school, but they actually did not show school refusal. 2) In a girls school has reported lots of bullying than a boys school and there were sexual difference in under-standing for bullying.3) They understood group bullying that Japanese bullying pattern and school violence that included violent factor.4) They showed that took a defiant attitude toward teachers.

Keywords: junior high school students,School maladjustment,group bullying,school violence.

問題と目的

生徒における学校生活への不適応現象は生徒や学校の問題のみならず，今や社会全体の担う課題として深刻化している。それは学校不適応の様態や問題行動がある社会の特徴的な行動様式の表れであり,社会病理現象の反映とも考えられるからである。

日本の場合，80年代では‘学校に対する生徒の反乱’と言われた校内暴力やいじめ，登校拒否などが生徒の学校不適応として取り上げられたが，社会変化に伴い，その不適応の様相にも変化がみられた（こころの科学，1999）。

いじめや不登校が学校不適応の一要因になる中で，学校へ「行きたくてもいけない」というだけではなく，「行きたくないから行かない」不登校児やひきこもる生徒が増えている現状である（鍋田，1999）。

一方，韓国では特定生徒だけが関係するような印象ではった「犯罪/非行」から80年代後半から広がり始めた「学校暴力」が学校不適応として考えられる（金宗美，1997）。

校内暴力に関する沖原(1983)の比較研究によると，日本は校内暴力の三要素，つまり対教師暴力，器物破壊暴力，生徒間暴力のすべてが，かなり顕著に発生している「重症型」と分類されたことに対し，韓国は主として生徒間暴力に限定され，対教師暴力や器物破壊暴力のほとんどない「軽症型」と分類された。

つまり，当時は学校や教師に対する反抗のような性格のものはみられなかったといえる。

しかし，授業妨害や教師に対する強い不満など学校や教師へ向かう「重症型」の校内暴力の可能性がここ数年，報告されるなど，その様相に変化がみられる。

それに加え，90年代後半から集団いじめ（日本の‘いじめ’といえるが，韓国では‘ワンタ’というスラングで呼ばれたのを99年1月から教育部により‘集団いじめ’と表記することになった）が現れ始め，注目を集めている（週刊韓国，1998）。

生徒間暴力が中心であった学校暴力から集団いじめの発生は心理的，人格的攻撃であり，被害者だけではなく加害者までも心理的荒廃化をもたらす（白雲鶴，1999）という指摘のように韓国ではその対応に戸惑いを見せている。

日本の場合，校内暴力の内，言語的ものが「いじめ」へ移り変わり，そこから登校拒否や自殺，家庭内暴力などの問題行動が派生しており（稲村，1995，森田・清永，1995）その様態や性質の点でも，影響力の点でも深刻さをもち，昔ながらのいじめとは全く性質の異なったものになったといえる（笠井，1998）。

韓国では 集団いじめの出現で，日本のような経路で韓国でも「学校暴力」の中から「集団いじめ」が生まれ，次は不登校現象が現れるのではないかと予測される。

そこで，本研究では韓国の中学生における学校不適応の現状，つまり，①学校不適応感を問う「学校にいきたくない」と思ったことやその原因の探索，②集団いじめの現状や学校暴力に関する生徒の認識，③学校暴力の変

化として教師や学校に対する生徒の認識を把握することを目的とする。

方　法

1．調査対象と時期

1）対象：韓国釜山市，大丘市内中学校2年生154名（男子―76名，女子―78名）。

2）時期：1999年9月―10月。本調査者が学校を訪ね，口頭で説明した上で，クラスごとに実施。

2．質問紙の作成と内容

1）**韓国版質問紙の作成**―翻訳における信頼性の確保のため，まず，日本語で質問紙を作成した後，韓国語へ翻訳を行い，再び韓国語から日本語へ訳し，比較検討した。

2）**調査内容**

①学校不適応感の経験やその原因に関する質問3項目，②集団いじめの現状や学校暴力に関する質問14項目，③教師や学校へ向かう生徒の不満感を問う質問3項目から構成された。

質問紙参照：東京都立教育研究所(1997)，法務省人権局(1994)，中・高校生の意識(1984, NHK)，校内暴力に関する多面的調査(1981，竹内)

結　果

1）学校不適応感の経験に関する分析

学校不適応感を調べるため，「学校に行きたくないと思ったこと」や「登校状況（それでも学校に行ったのか)」に関する二項目を2件法で答え，その男女差を見るためカイ二乗検定を行った。

しかし，複数選択させた「学校嫌い感の理由」に関しては，百分率で男女の割合を調べた。

学校不適応感に関する質問である「学校に行きたくないと思ったことがありますか」では<ある>と答えた人が，男―60.5%，女―83.3%で，男女間に有意差が見られた（$\chi^2(1, N=154)=9.949$, $p<.01$）。Figure 1は学校不適応感の男女差を示す。

「(学校に行きたくないと思ったことがあると答えた人に)学校に行きたくないと思った時，実際には学校に行きましたか」という質問をした。その結果，男女とも<遅れずに行った，遅れたが行った:男―100%，女―98.5

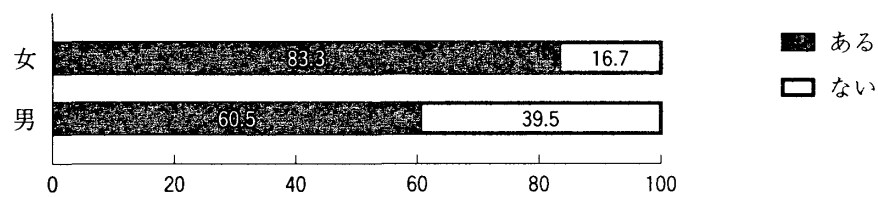

Figure 1　学校不適応感の男女差

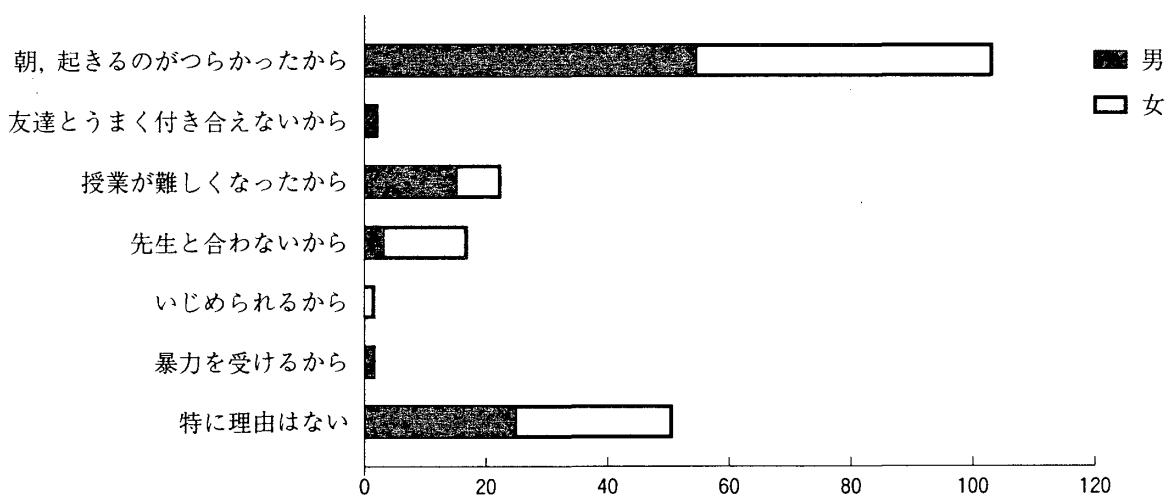

Figure 2　学校不適応感の理由における男女差

%>で，いまだに不登校の傾向は見られなかった。

学校に行きたくないと思ったことはあるが，学校を休んだという生徒は非常に少なかった（χ^2(2，N=110)=.905，p<.50)。

Figure 2は学校に行きたくないと思った理由の男女差は示す。男女共に<朝，起きるのがつらかったから:男—54.7%，女—49.1%>，<特に理由はない:男—25%，女—26.3%>という答えがもっとも多かった。

次いで，男子の場合は<授業が難しくなったから：15.6%>，女子の場合には<先生と合わないから：14%>の順で，男女間の差がみられた。

2）集団いじめの現状や学校暴力に関する生徒の認識の分析

集団いじめに関する質問項目では，集団いじめの経験や集団いじめに対する認識を調べ，男女差をみるためにカイ二乗検定を行った。

次いで，学校暴力や集団いじめなど学校不適応や問題行動の捉え方を調べるため，それぞれの不適応状や問題行動を表す項目に関して「集団いじめ」であるもの，「学校暴力」であるもの，「どちらでもない」の3つの中に，当てはまるのを選択させた。

その類型を調べるためカイ二乗検定を行い，生徒がどのようなものを集団いじめや学校暴力と認識しているのかを調べる。

集団いじめに関する質問である「今年になってから，‘集団いじめ’がありましたか」は，Figure 3で示される。集団いじめの経験において男—51.3%，女—93.6%で，男女差が見られた（χ^2(1，N=154)=34.68, p<.001)。

「集団いじめをどう思いますか」の質問では，Figure 4に示すとおり，<場合によって，いじめる人が悪いと限らない：男—32.9%，女—66.7%>，<どんな理由があってもいじめはいけない：男—46.1%，女—18%>，<ふざけ半分でやっているから大したことではない：男—10.5%，女—3.8%>での男女間に有意差がみられた（χ^2(6，N=154)=22.194，p<.01)。

次に，学校暴力や，新たに登場した集団いじめを生徒はどう捉えているのかを調べるため，それぞれの項目（問題行動を表す行為）に対して「学校暴力」であるもの，「集団いじめ」であるもの，「どちらでもない」を選択させた。Figure 5に示す。

その結果，14項目の中で，「集団いじめ」であると思う項目には，<仲間外れにする（χ^2(2, N=112)=143.16, p<.001)><無視して口を聞かない（χ^2(2, N=112)=148.09，p<.001)>が挙げられた。

そして，「学校暴力」には，<使い走りなどわざと嫌がることをする（χ^2(2, N=112)=17.43，p<.001)>，<叩いたり蹴ったりする暴力をふるう（χ^2(2, N=112)

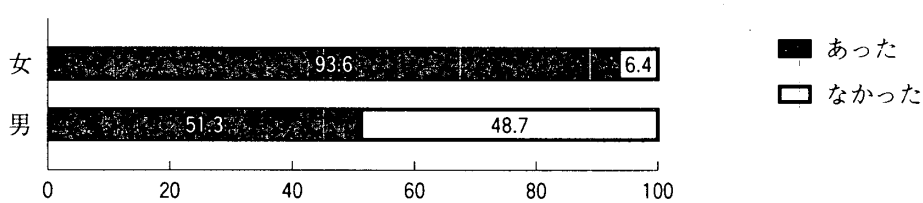

Figure 3　集団いじめ現象の男女差

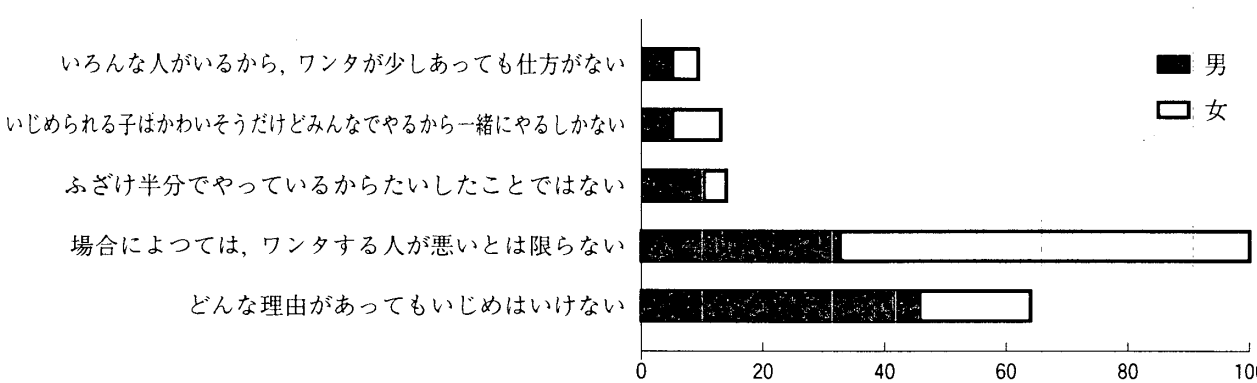

Figure 4　集団いじめに対する考えの男女差

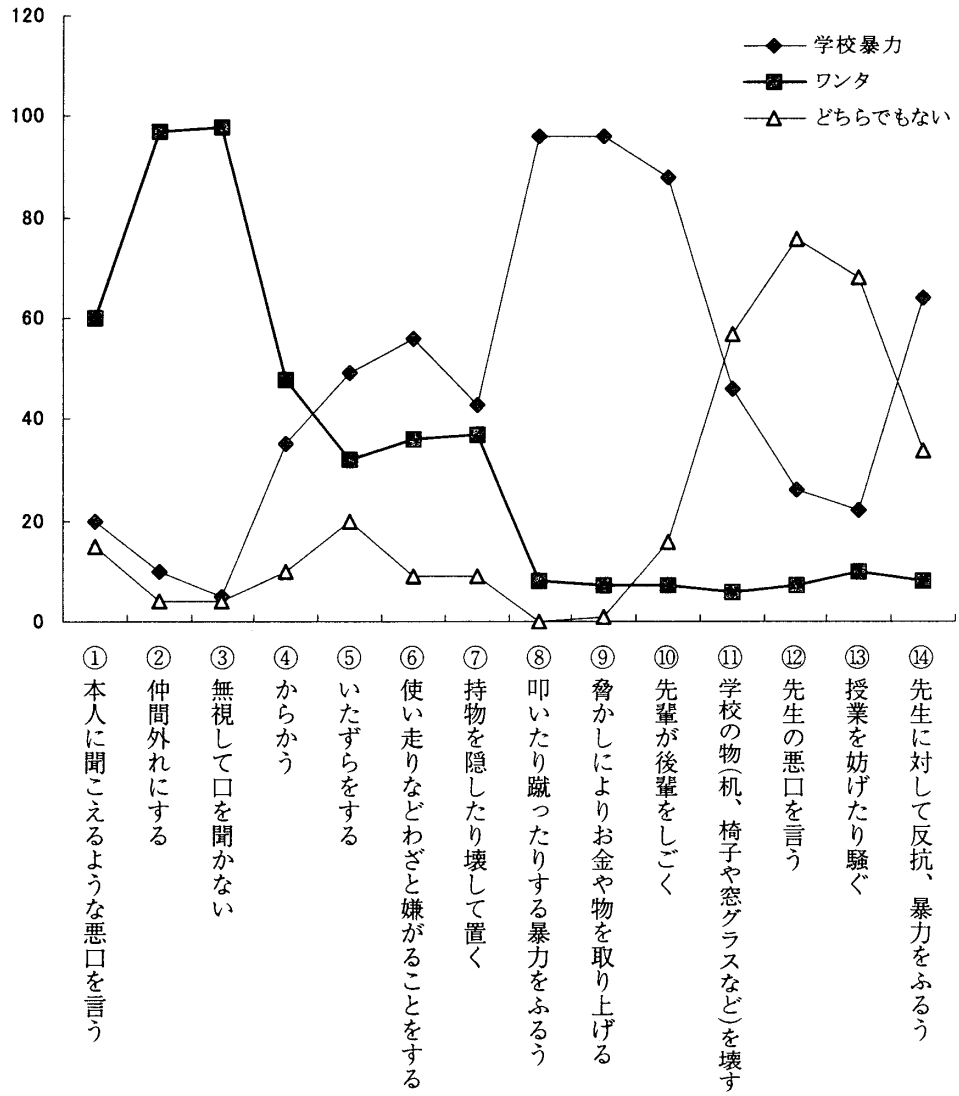

Figure 5 「学校暴力である」「集団いじめである」と思う項目の分類

＝138.29, p＜.001)＞, ＜脅かしによりお金や物を取り上げる（χ^2(2, N=112) 138.34, p＜.001)＞, ＜先輩が後輩をしごく（χ^2(2, N=112)＝100.73, p＜.001)＞, ＜先生に対して反抗し, 暴力を振るう（χ^2(2, N=112)＝88.29, p＜.001）が挙げられた。

しかし, ＜学校の物（机, 椅子や窓グラスなど）を壊す（χ^2(2, N=112)＝42.07, p＜.001)＞, ＜授業を妨げたり, 騒ぐ（χ^2(2, N=112)＝75.07, p＜.001)＞など, 日本でいう‘校内暴力’と分類される行為については「どちらでもない」と答えた。

3）教師や学校に対する生徒の認識に関する分析

日本でいう‘校内暴力’の様相―対教師暴力, 器物破壊に関して質問した。それの男女差をみるため, カイ二乗検定を行った。

日本の‘校内暴力’の特徴といえる対教師暴力や学校器物破壊に関する質問である「先生の指導に満足していますか」に対して, 5件法で答えたものを, 操作的に3分したのを Figure 6 に示している。

その結果, ＜満足する＞が男―46.1%, 女―21.8%であり, ＜不満足＞が男―21.1%, 女―44.9%で, 男女間に有意差がみられた（χ^2(2, N=154)＝13.305, p＜.01)。

「先生に暴力を振るいそうになったことがありますか」の質問では「ある」と答えた生徒が, 男女とも多く(60.5%, 61.5%)（χ^2(1, N=154)=.017, n.s.), 対教師暴力の可能性が窺われた。

「学校の物品を壊したりするのを見たことがありますか」では＜ある＞と答えた生徒が男―32.9%, 女―12.8%

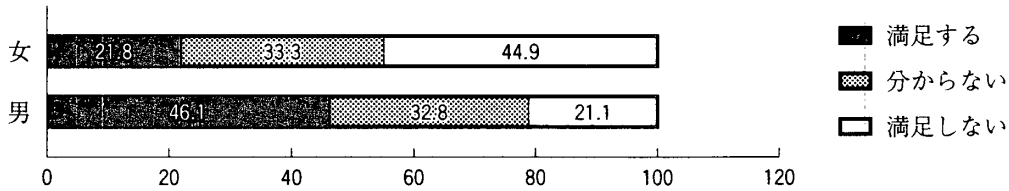

Figure 6　対教師満足度の男女差

で，男女間に有意差がみられた（χ^2(1，N=154)=8.833，p<.01)。

考　察

(1) 学校不適応感の経験ついては，不登校傾向といえる「学校に行きたくないと思ったこと」の項目では，全体的に70%を超える生徒が<ある>と答えた。

その理由としては，<朝，起きるのがつらいから><特に理由はない>が80%近く，はっきりした理由もない無気力さが窺われる。

しかし，女子の場合，15%の生徒が<先生と合わないから>と答えており，男子生徒に比べ（3%）対教師関係の難しさが示された。

「学校に行きたくないと思った時，実際にはどうしたか」と聞くと，応答者(111名)の中一人だけが<休んだことがある>と答えており，学校に行きたくないと思いながらも，実際，学校を休むことはなく，通学しているのが分かった。

このような結果は，黄(1991)が調査した韓国の青少年の問題行動において不登校（登校拒否）現象は見られないという先行研究とも一致した。

しかし，現在のところ，不登校現象は見られないものの，70%を超える生徒が学校に行きたくないと思った経験があることがを示された。

さらに，日本の先行研究（法務省，1994）でも，不登校の要因として最も目立つ無気力が韓国の生徒においても一つの要因であることから，不登校現象の前兆とも考えられる。

その他，日本では不登校の主要要因として挙げられた交友関係が韓国ではほとんど挙げられなかったことは注目すべきところである。

(2) 集団いじめの現状や学校暴力に関する生徒の認識については「集団いじめがあったか」の項目で，男子(51.3%)，女子(93.6%)の差が明らかであり，‘青少年対話の広場(1998)’調査結果からも女子の方が男子に比べ，集団いじめの経験が多いということが裏付けられた。

これは，女子校で集団いじめがより深刻に発生しているとも考えるが，同じ場面であっても女子の方がより敏感に厳しく，集団いじめを捉えている可能性も考えられる。

ところで，日本の先行研究において，いじめ経験の男女差は見られなかった（法務省人権局,1994，教育アンケート収録年鑑，1986)。

次に，「集団いじめをどう思うか」に関しても，男女差が見られ，<場合によって，いじめる人が悪いと限らない：男—32.9%，女—66.7%>で，女子の方が多く，ある意味でいじめを肯定しており，自己正当化の傾向が見られた。

逆に<どんな理由があっても集団いじめはいけない：男—46.1%，女—18%>では男子の方がよりいじめを否定的なものとして捉え，女子は場合によってはいじめがあっても仕方ないという解釈も可能である。

こういう結果に対し，日本の先行研究（東京都立教育研究所，1997）では，男女を問わず，<どんな理由があってもいじめはいけない>といういじめを否定する意見が最も多かった。この結果は日本の生徒がよりいじめの深刻性を感じているとも考えられる。

学校暴力や，新たに登場した集団いじめを生徒はどう捉えているのか，日本でいう校内暴力，いじめとはどう違うのかを調べるための質問で，<仲間外れにする><無視して口を聞かない>といった行為を「集団いじめである」と思う傾向がみられた。

<叩いたり蹴ったりする暴力をふるう>，<脅かしによりお金や物を取り上げる>，<先輩が後輩をしごく>は最も「学校暴力である」と思う傾向がみられた。

それに加え，<学校の物（机，椅子や窓グラスなど）を壊す>，<授業を妨げたり，騒ぐ>など，日本でいう‘校内暴力’と分類される項目については‘学校暴力’ではなく，「どちらでもない」と答えた生徒が多かった。

しかし，日本の先行研究（法務省人権局1994）によると，「いじめであると思うもの」として<暴力をふるう><お金やものを取り上げる><人の持物にいたずらをする><無視して口を聞かない>などが挙げられた。

韓国で捉えている‘集団いじめ’と日本での‘いじめ’

の様態がやや異なるのが分かる。

韓国は仲間関係からの排除や言語的攻撃というかなり典型的なものを多く挙げられたことに対し，日本の方がより多様な行動からなる現象として捉えているように思われる。

韓国での‘集団いじめ’というのは，最初‘ワンタ’というスラングで名付けた際，その言葉自体で‘仲間外れ’という意味が含まれてある。

そこで，＜仲間外れにする＞＜無視して口を聞かない＞という項目が最も「集団いじめである」ものと認識されやすいと考えられる。

これに対し，日本では最も「いじめであるもの」と挙げられた＜叩いたり蹴ったりする暴力をふるう＞，＜脅かしによりお金や物を取り上げる＞項目が韓国ではその暴力的要素から「学校暴力である」と認識されやすい傾向が窺われる。

(2) 最後に，学校暴力の変化として教師や学校に対する生徒の認識については，日本の‘校内暴力’の特徴といえる対教師暴力や学校器物破壊に関して次のようである。

「先生の指導に満足しているか」に対して，女子の方がより満足度が低く，学校不適応感における質問でも不適応の要因として先生との関係を挙げたことに繋がると思われる。

また，韓国では実際の対教師暴力や器物破壊などはないが，「先生に暴力を振るいそうになったことがあるか」の質問では「ある」と答えた生徒が，男女ともに(60.5%, 61.5%)多く，教師に対する反抗的態度や不満感が窺える。

かつて，韓国は厳格な儒教道徳に従って行動することが要求され，長幼の序を重んじ，親や教師の権威を尊重することが大事にされてきた。

ところで，尊敬すべき教師に対し，暴力を振るいそうになり，不満に満ちているということは韓国社会にとってかなりの反響を呼び起こしている。

「学校の物品を壊したりするのを見たことがあるか」の器物破壊に関しては，目撃の経験としてそれほど深刻さはみられなかった。

総　括

本研究は韓国の中学生における学校不適応の実態と認識を調べることを目的とした。しかし，今回は日本との比較研究は行ってないため，参考として日本の先行研究を比較の材料として引用した。

今回の研究の主要な点をまとめると，

①韓国の中学生は学校に行きたくないと思った経験は多くの生徒からみられるが，実際に不登校現象は生じておらず，登校しているのが明らかになった。しかし，今回の研究では学校を休まず，登校できる要因に関しては検討してない。

日本の中学生の登校を巡る意識調査では欠席や欠席願望を抑制する要因として「規範的価値」が示された（本間，2000)。

これは韓国の中学生にとっても登校への要因として高い規範的価値が推論できる。

②集団いじめの現状として女子の方がよりいじめの発生を報告しており，これは‘青少年対話の広場(1998)’の調査結果とも一致する。

韓国は男女共学が少なく，特に今回，調査対象となった学校が男女別校であったことから，女子校でよりいじめの発生率が高いという結果や同じ現象であっても女子の方がより敏感に受け取る可能性も示唆される。

いじめの認識についても男女差はみられ，韓国の女子校における交友関係では仲間から排除されることや言語的な攻撃をより酷いものとして捉えると考えられる。男子は暴力的なものが中心で仲間外れや言語的な現象には大きくとらわれてないことが考えられる。

しかし，日本の場合，男女共学であることから男女の交友関係のバランスがとれ，男女差はみられない印象である。

③学校暴力の変化として教師や学校そのものに対する生徒の認識について調べたところ，対教師関係においては女子の方がより問題性を感じており，学校不適応感における不適応の要因として対教師関係を挙げたことに繋がると思われる。対教師暴力の可能性においても反抗的態度や不満感が窺え，今後の経過が注目される。

韓国は根強い儒教思想が継承され，長幼の序を重んじ，親や教師の権威は大事にされる。恩師の影を踏むことさえいけないものといわれてきた。しかし，時代は大きく変わり，先生に暴力を振るうことや先生の権威に対抗するような様子が今回の調査でも窺われた。

具体的に，韓国では学校暴力といわれるものの日本における校内暴力の様相とは異なり，対教師暴力や器物破壊はみられなかったのが，最近の様子から日本の校内暴力に接近していくような印象である。

韓国でいう集団いじめに関しても日本の典型的ないじめの類型がみえているのが次第に多様化・悪質化されていくことが予測される。

生徒の学校不適応にはその社会の特徴や様々な様相が見られ，その対応策においてもそれぞれ工夫されるべきである。ところが，韓国と日本は類似した教育システムを持ち，学歴志向や受験競争などの社会的雰囲気からなる，生徒の不適応状における共通のところも示される。

生徒の不適応問題において日本のあとを追っていくの

ではないかと韓国では憂慮の声は高い。学校不適応における変貌を遂げつつある韓国において，時代の節目を考え，なお一層の研究が必要と考える。

引用文献

白雲鶴　1999　学校暴力と集団いじめ現象の実態や対応方案　韓国心理リハビリテイション学会心理リハビリ研究，第6券
1号，223-244.

法務省人権擁護局　1994　中学生の生活に関するアンケート調査結果.

本間友巳　2000　中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析　教育心理学研究，48券1号，32-41。

黄　恵子　1995　青少年問題行動と家族・親子関係に関する臨床心理学的研究―日韓比較にもとついて―九州大学大学院教育学研究科博士学位論文.

稲村　博　1985　いじめの心理と病理　ジュリスト No.836, 23―28.

神村栄一・向井隆代　1998　学校のいじめに関する最近の研究動向―国内の実証的研究から―カウンセリング研　Vol.31 No.2, 74-84.

笠井孝久　1998　小学生・中学生の「いじめ認識」　教育心理学研究，46券1号
77-85.

金宗美　1997　小学校で起こる学校暴力の性格と誘発要因　Korean Journalof
Psychology : Developmental, 1997. Vol.10. No.2, 17-33.

金明識　1999　日本のいじめの総合対策　新教育，99. 6，122-125.

文部省　1994　いじめの問題への取り組みの調査結果。

森田洋司・清永賢二　1995　新訂版　いじめ―教室の病い―金子書房

鍋田恭孝　1999　学校不適応とひきこもり　こころの科学，87券，日本評論社.

西村春夫　1982　校内暴力の最近の傾向
その社会心理的考察―　教育心理，30券9号，18-25.

東京都立教育研究所　1995-1997　いじめに関する意識調査.

李　漢教　1983　韓国の少年非行について　青少年問題，30券2号，12-20.